

私たちは、人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。（使徒言行録5の29より）

We must obey God rather than men!

私たちは常に何かに従っている。幼いときは、両親、とくに母親に従い、学校に行くようになれば、学校の先生に従う。会社に勤めるなら、その上司に...というように、どこに行ってもこの地上に生きるかぎり、私たちの上に立つ人に従うのはごく当然のことである。

しかし、人間はしばしば過ちを犯す存在である。戦前も上に立つ人間一天皇から政治家、軍人、教師やマスコミ...等々ほとんどは、中国やアジアへの侵略戦争を正しい戦争、聖戦とし、大きなまちがいを犯し、日本軍は、膨大な人たちを殺傷することに至った。

現代においても、政治、学校、職場、などにおいても、繰り返しまちがいが行なわれている。こうしたことからすぐにわかるのは、人間を超えた揺るぎないものこそが、私たちの従うべきものだということである。それは時代、地域、年齢等々を超えて、あらゆる人間にあてはまる真理であり、歴史上で、その真理を究極的に体現したのはキリストであった。そのキリストにそうした本質を与えたのが唯一の愛と真実、そして正しさに満ちた神である。

ここに引用した言葉は、当時の国で最も権威ある大祭司や宗教的指導者たちが、キリストの復活など語ってはならないと厳命したのに、ペテロたちは、それに従わずにキリストの復活を証しすることを止めなかった。そして、牢にいれられてもなお、屈することなく、人の言うことでなく、真理そのもの、神に従うべきことを言ったのである。これは、命がけで語られた言葉であり、同様のことは、殉教さえも覚悟してキリストのことを証しし、伝えようとする人たちによって、長い歴史に繰り返し現れてきた。

そのような厳しい状況でなくとも、私たちの日毎の生活のなかで、つねに人に、人間的なものに従うのか、神に従うのか、ということが問われている。

朝起きて まず、人間的な思いにしたがってテレビ、新聞といった人間に関わる出来事を見て、そうしたものに自分の心の世界を従わせるのか、それともまず、神の言葉を思い、祈りによってはじめようとするのか、また大空や星々を見て、そこに神からの呼びかけを感じて従おうとするのか—それとも何もそこに耳を傾けようとしないで人間的な思いに従おうとするのか...等々。

主イエスも「まず神の国と神の義を求めよ」と言われたことが思いだされる。



毎年11月に、松山を経て九州から中国地方の一部の集会にて御言葉を語らせていただく機会が与えられていて、その途中で秋吉台高原に立ち寄ることができた。

秋吉台といえば、秋芳洞が有名で、秋吉台高原の植物のことはあまり語られないようだ。私にとっては、このリンドウの野生の姿がことに心に残り、いつも心惹かれるところである。

花の色合い、そしてその姿、周囲の高原の様子とあいまって、得難い光景となっていた。野生のリンドウは時折、山の路傍などで見いだすがなかなか見られない。

リンドウは、50数年前の学生時代に、京都の鞍馬山からはじめて、一週間近くもかけて、京都北山から丹波山地をの山々を越え、京都大学農学部の演習林を経て日本海側の福井県小浜市を目指したときに出会ったものが思いだされる。その演習林とされた広大な地域は山深く、当時は大台ヶ原（三重県と奈良県の県境にある）の一部とともに、関西では稀な原生林が残されている地域だとされていた。

そこに行くことはどの方面から行っても相当の山道を歩かねばならず、アクセスは相当に困難であった。

重いリュックを背負い、テントでの野宿、山小屋も、店もまったくない奥深い山々の谷を歩き、峠を越え、ときに雨や濃霧で指導標なき道に迷い、五万分の一の地図と磁石を常時手にしつつ、長くて、遠い山旅をし、ようやく由良川源流に降り立ったときに咲いていたリンドウが、私の野生リンドウとの最初の出会いだった。

そのときに見た青い色とそのすぐそばの由良川の流れ、紅葉などが今にいたってもわすれることのできないものとなって心に刻まれている。

それ以来、野生のリンドウは常に私の心惹かれる花となった。その青い色は、大空や海といった広大なものにも神が用いた色であり、天の清い雰囲気なたたえている。神はそうした自然の野草の花々によっても、人間に天の国を語りかけておられる。